

研究報告

武満徹《Eclipse》と《November Steps》における「間」の方法論
——譜面構造・演奏実践・聴取経験の相互作用から——

The Methodology of “Ma” in Toru Takemitsu’s Eclipse and November Steps
From the Interaction of Score Structure, Performance Practice, and Listening
Experience

邱 愈 著

国立音楽大学

Yuming QIU

Kunitachi College of Music

概要

「間」は、本稿では単なる休止や無音ではなく、音の前後に形成される距離、余韻、呼吸、待機を含む時間的・空間的な関係として扱う。本研究は、武満徹《Eclipse》(1966)と《November Steps》(1967)を対象に、この「間」を抽象的な美意識としてではなく、作品内で観察可能な作曲上の条件として捉え直すものである。

従来の研究では、武満の日本的美意識、東西楽器の対置、音色や時間構造が論じられてきた。しかし、譜面上の配置、邦楽器の余韻、演奏者の呼吸、聴取者の予測がどのように連動し、「間」として作用するのかについては、なお整理の余地がある。本稿では、楽譜、録音、音色配置などの作品資料、演奏実践に関する記述、作曲家言説および先行研究を相互に照合する。そのうえで、両作品における「間」の作用を、A〈流動の停止〉、B〈沈黙の配置〉、C〈期待の裏切り〉の三つの分析次元から検討する。分析の結果、《Eclipse》では、図形記譜と自由なリズムによって、尺八の息成分と琵琶の残響が局所的な応答関係を作り、短い停止や余韻が次の音を準備する時間として機能していることが明らかになった。《November Steps》では、この局所的な処理が、管弦楽の音塊、邦楽器の独奏カデンツァ、長い休止、密度変化を介して、全曲規模の形式設計へ拡張されている。以上より、武満作品における「間」は、静寂を装飾的に用いる表現ではなく、譜面構造・演奏実践・聴取経験を連動させる作曲上の方法として理解できる。

In this paper, “ma” is treated not simply as a pause or silence, but as a temporal and spatial relation formed around distance, resonance, breathing, and waiting before and after sound. This study examines Toru Takemitsu’s

Eclipse (1966) and November Steps (1967), reconsidering “ma” not as an abstract aesthetic metaphor but as an observable compositional condition within the works. Previous studies have discussed Takemitsu’s Japanese aesthetic orientation, the opposition between Japanese and Western instruments, timbre, and musical time. However, the ways in which score layout, resonance of Japanese instruments, performers’ breathing, and listeners’ prediction interact as “ma” still require further clarification. The study compares score materials, recordings, timbral layout, descriptions of performance practice, Takemitsu’s own writings, and previous research. It then analyzes “ma” in the two works through three dimensions: A, suspension of flow; B, placement of silence; and C, violation of expectation.

The analysis shows that, in Eclipse, graphic notation and free rhythmic treatment allow the breath components of the shakuhachi and the resonance of the biwa to form local responsive relationships, in which short suspensions and lingering resonances prepare the next sound. In November Steps, this local treatment is expanded into a large-scale formal design through orchestral sound masses, solo cadenzas of Japanese instruments, long pauses, and changes in density. Therefore, “ma” in Takemitsu’s works can be understood not as an ornamental use of silence, but as a compositional method that connects score structure, performance practice, and listening experience.

1. 背景と課題

「間」は音楽・建築・映像などで広く用いられる概念であり、「余白」「沈黙」などの直感的な意味合いで使われることが多い(西山ほか 1983, 15-18)。しかし、

その語が作品内のどの現象を指すのかは一定ではなく、客観的な説明がしにくい。本稿では、「間」を修辭的なことばとして扱うのではなく、「間」の成立条件を觀察可能なかたちで示すことを目指す。

武満徹の音楽については、自然、沈黙、日本的感性、東西文化の接触、創作源泉といった観点から多くの議論がある（上野編 2007, 238-245; 長木 2015, 21-29; Ohtake 1993; Takemitsu 1995, 51-64）。本稿が問題にするのは、それらの美学的説明を否定することではない。むしろ、それらの説明が作品分析の中でどのような音楽的条件に結びつくのかを明確にすることである。

h2: 研究の立場本稿は、「間」を一つの固定的な定義に押し込めない。代わりに、作品内で觀察できる要素がどのように組み合わせると「間」と呼びうる聴取経験が生まれるのかを、条件の束として記述する。ここでいう聴取経験とは、流れが一時的に止まる感覚、注意の向きが切り替わる感覚、次の出来事への予測が外れる感覚などを指す。これは心理実験による測定概念ではなく、楽譜、録音、演奏実践、先行研究の記述から確認できる分析上の経験概念である。

1.1. 形式化が必要な理由

「間」を語る言葉は豊富に存在するが、同じ「間」という語が、休止、余韻、身体的な呼吸、空間的距離、聴取上の期待など、異なる現象を指すことが多い。そのため、語の印象だけで議論すると、作品の中で実際に何が起きているのかを共有しにくい。

そこで本稿は、説明の対象を曖昧にしないため、三つの条件を置く。第一に、作品内のどの局面を問題にしているのかを指し示せること。第二に、その局面を分析する観点を明確にできること。第三に、楽譜、録音、演奏記述、作曲者言説、先行研究のうち、どの分析材料に基づいているのかを示せること。この三条件を満たす記述だけを、本稿では「間」の分析として採用する。

1.2. 武満徹の作品を対象とする理由

本稿が《Eclipse》と《November Steps》を対象とする理由は、両作品が尺八・琵琶という同じ邦楽器を共有しながら、前者では二重奏、後者では邦楽器と管弦楽の対置という異なる規模で「間」の処理を示すためである。《Eclipse》は、邦楽器のための記譜法を模索する過程に位置づけられ、《November Steps》へ向かう重要な試行として論じられてきた（Burt 2001, 112-113）。

《November Steps》では、邦楽器と西洋管弦楽は単に融合されるのではなく、対立と統合の両方を含む音響的・時間的關係を形成する（Uno 1998, 213-251; Irlandini 2022b）。また、武満自身による「十一の段」や段物との

關係づけは、作品の形式と聴取上の分節を考えるうえで重要であるが、実際の時間構造は単純な十一分割には還元されない（Takemitsu 1995, 62-63; Irlandini 2022a, 39-63）。この複数の層が重なるため、両作品は「間」を休符や沈黙だけに還元せず、譜面構造・演奏実践・聴取経験の連動として分析するのに適している。

2. 目的

本稿の目的は、武満徹《Eclipse》と《November Steps》において、「間」がどのような觀察可能な要素のつながりとして成立しているのかを整理し、その説明に必要な分析次元を抽出することである。

本稿は、概念史全体の整理、知覚効果の実験的測定、視覚音楽システムへの実装を直接の対象とはしない。これらの領域に移る前段階として、「間」をどの語彙で記述し、どの分析材料によって確かめるのかを整える。

扱う問いは三点に絞る。第一に、「間」を支える要素は、譜面構造、音響、演奏実践、聴取経験のどこに現れるのか。第二に、それらの要素はどのように連動し、流れの停止、注意の再配分、期待のずれを生むのか。第三に、二作品を横断して説明できる最小語彙として、どの分析次元が妥当なのか。

3. 方法：多系統相互参照と分析材料の整理

本稿は、作品資料、演奏実践資料、作曲者言説・先行研究の三系統を相互に照合する。作品資料には、楽譜、録音、音色配置、休止位置を含める。演奏実践資料には、尺八・琵琶の奏法、呼吸、入りの揺れ、間合いに関する記述を含める。作曲者言説・先行研究には、武満自身の発言、作品解説、既存の分析研究を含める。

分析に用いる楽譜は、《Eclipse》（武満 1966）と《November Steps》（武満 1967）である。録音は、ここでは演奏時点の細部を確定するための資料ではなく、残響、入りの揺れ、音色密度、休止の働きを確認するための分析材料として用いる。

この方法は、単一の文献や印象だけに依拠して「間」を語ることを避けるためのものである。各局面について、どの分析材料がどの説明を支えているのかを整理することで、過剰な解釈を抑え、他者が確認しやすい記述を作る。

3.1. ワークフロー

本稿の作業は、作品資料・演奏実践資料・作曲者言説および先行研究を照合し、そこから「間」として働く局面を抽出し、さらに三つの分析次元に整理する、という順序で行う。図式化すると図1のようになる。

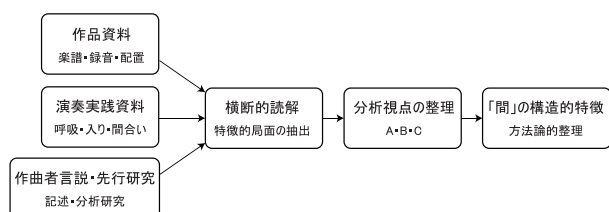


図 1: 本稿の分析手順

3.2. 分析材料の整理

本稿で用いる分析材料の整理は、解釈を増やすための表ではなく、解釈を減らすための表である。分析材料が薄い説明は表の中で目立つため、言い過ぎを避けられる。また、同じ局面でも、楽譜上の配置、録音上の響き、演奏実践上の呼吸、文献上の説明が完全には一致しない場合がある。本稿では、そのずれを誤差として捨てず、どの層で食い違うのかを記録する。

h2: 手順手続きは次の順序で行う。第一に、作品の中で「間」として働く可能性のある局面を、録音の聴取、楽譜の読解、既存研究の記述から抽出する。第二に、各局面について、構造、音響、演奏実践、聴取経験に分けて分析観点を整理する。第三に、それぞれの分析観点がどの分析材料に支えられているのかを確認する。第四に、似た働きを示す局面をまとめ、説明に必要な分析次元として抽出する。

4. 分析次元

本稿は、「間」の作動を説明するために、A〈流動の停止〉、B〈沈黙の配置〉、C〈期待の裏切り〉の三つの分析次元を設定する。これは筆者が本研究の分析のために設定する操作的分類である。その妥当性は、分類名そのものではなく、各次元が作品内の局面、分析観点、分析材料を伴って説明できるかによって判断される。

三つの次元は、音響的持続、構造的配置、時間的見通しという異なる層に対応する。A〈流動の停止〉は、響きや残響によって進行感が弱まる局面である。B〈沈黙の配置〉は、無音や休止が句法や距離を構成する局面である。C〈期待の裏切り〉は、音楽的展開によって形成された予測が実際の出来事によって外れる局面である。音楽における期待や時間の非線形性を扱う議論は、この第三の次元を説明する補助線となるが、本稿ではそれを心理実験の枠組みとしてではなく、作品内の配置を記述するために限定して参照する (Meyer 1956, 25-31; Kramer 1988, 20-37)。

4.1. A 〈流動の停止〉

A〈流動の停止〉は、時間が流れている感覚が、構造や音響の条件によって一時的に止まる、または遮られる局面である。たとえば、持続音の残響が次の出来事の輪郭を曖昧にする場合や、分節の境界が薄くなる場合がこれにあたる。単なるテンポの遅さではなく、速いテンポの中でも、境界が弱まり、聴取上の進行感が一時的に止まる場合には成立する。

4.2. B 〈沈黙の配置〉

B〈沈黙の配置〉は、無音が「空白」としてではなく、句法の切断、距離の形成、注意の再配分を担うように置かれる局面である。成立条件として、無音の長さだけでなく、前後の音色、強度、密度、演奏上の呼吸や入りの揺れが説明できることを求める。尺八の音色については、音高よりも音色そのものが構造的意味をもつという議論があり、この点は休止や息成分を単なる副次的要素として扱わない本稿の立場と関係する (Bellando and Deschênes 2020, 43-47)。

4.3. C 〈期待の裏切り〉

C〈期待の裏切り〉は、音楽的展開によって聴取上の予測が形成され、その予測が実際の出来事によって外れることで、時間経験が組み替わる局面である。ここでいう「裏切り」は、心理実験上の測定概念ではない。反復、音域、強度、音型、配置のまとまりなどの手がかりが「次に何が来るか」という見通しを作り、その見通しが遅延、迂回、置換によって外れる現象を指す。

5. 二作品への適用

本章では、三つの分析次元を《Eclipse》と《November Steps》の具体的局面に適用する。記述は、作品ごとに「分析のポイント」「分析材料」「結果」の順で整理する。

5.1. 《Eclipse》

分析のポイントは、尺八と琵琶という二つの邦楽器が、図形記譜と自由なリズムの中でどのように応答し、局所的な「間」を作るかにある。《Eclipse》の記譜は、邦楽器の音色、奏法、余韻を西洋五線譜だけで完全に固定するのではなく、演奏者の実現を含めて音響を組織するための実践的な方法として理解できる (Burt 2001, 112-113)。

分析材料としては、楽譜上の配置、録音上の残響、尺八の息成分、琵琶の撥音と減衰、先行研究における邦楽器奏法の説明を用いる。とくに尺八では、音色、

表 1: 分析次元の判別基準

分析次元	判別条件	主な分析材料
A 流動の停止	響きや残響によって進行感が一時的に止まる、または遮られる。	楽譜上の分節、録音上の残響、音色密度
B 沈黙の配置	無音や休止が句法、距離、注意の再配分として働く。	休止位置、前後の音色、呼吸、入りの揺れ
C 期待の裏切り	反復・配置・強度などが予測を作り、その予測が遅延・迂回・置換で外れる。	配置パターン、密度変化、録音上の入り、先行研究

息、身体的な吹奏感が旋律的要素と不可分に結びつくため、無音や息成分を単なる欠落として扱うことはできない (Bellando and Deschênes 2020, 45-47)。

分析の結果、《Eclipse》では、A〈流動の停止〉がもっとも局所的な形で現れる。尺八の息成分と琵琶の残響が次の音の輪郭を曖昧にし、出来事が明確に切断されず、聴取上の流れが一時的に止まる。ここでの停止は、テンポが遅いから生じるのではなく、音の消滅が次の発音と重なり、境界が薄くなることによって生じる。

同時に、B〈沈黙の配置〉も成立する。尺八と琵琶の間に置かれる短い無音は、単なる休止ではなく、二つの音色の距離を作り、注意を一方の楽器から他方へ移す働きをもつ。C〈期待の裏切り〉は、反復的な応答関係や音色配置によって「次の応答」を予測させながら、その入りが遅延したり、別の音色によって置き換えられたりする場面に現れる。したがって《Eclipse》における「間」は、独立した静寂ではなく、残響、呼吸、入りの揺れが作る局所的な時間操作として理解できる。

5.2. 《November Steps》

分析のポイントは、《Eclipse》で局所的に現れた邦楽器間の「間」が、管弦楽を含む全曲規模の形式設計へどのように拡張されるかにある。《November Steps》では、尺八・琵琶と管弦楽は単に混合されるのではなく、互いの音色的差異を保持したまま、対立と接続を繰り返す (Uno 1998, 213-251; Irlandini 2022b)。

分析材料としては、管弦楽の音塊、邦楽器の独奏カデンツァ的局面、長い休止、密度変化、分節の配置を用いる。Galliano は、管弦楽と独奏部の交替、ハーブと琵琶奏法の対応、管弦楽クラスターの細密な入り、尺八・琵琶独奏における開かれたリズム処理を指摘している (Galliano 2002, 242-244)。また、武満が題名を「十一の段」と関係づけて説明した点は、作品の分節を考えるうえで重要である (Takemitsu 1995, 62-63)。

分析の結果、《November Steps》では、B〈沈黙の配置〉が形式的規模に拡大される。管弦楽の音塊と邦楽器の独奏の間に置かれる休止は、単なる空白ではなく、二つの音響世界の距離を保ち、次にどちらの世界が立ち上がるのかを聴取者に待たせる。ここでの沈黙は、

対立する音色を分離するだけでなく、次の出来事への集中を作る。

C〈期待の裏切り〉も、より明確に現れる。管弦楽の配置や密度変化は、次の段落や解決を予測させる。しかし、邦楽器の自由な入り、独奏カデンツァ的な伸縮、長い余韻によって、その予測はしばしば遅延または置換される。これにより、聴取者は単純な直線的進行ではなく、待機と中断を含む時間を経験する。

A〈流動の停止〉は、断片化した出来事配置と響きの残りによって生じる。管弦楽の音塊は大きな推進力をもつが、その後に置かれる邦楽器の余韻や無音が、進行感を一時的に停止させる。したがって《November Steps》における「間」は、《Eclipse》の局所的な余韻や呼吸の処理を、全曲の構造的な時間へと拡張したものと理解できる。

6. 結論と展望

本稿では、武満徹《Eclipse》と《November Steps》における「間」を、抽象的な美意識ではなく、作品内で観察可能な作曲上の条件として整理した。分析の結果、A〈流動の停止〉、B〈沈黙の配置〉、C〈期待の裏切り〉の三つの分析次元は、二作品を横断して「間」を記述するための最小語彙として有効であると判断できる。

第一に、「間」を支える要素は、譜面上の分節、音響上の残響と密度、演奏実践上の呼吸と間合い、聴取経験上の予測のずれに現れる。第二に、それらは単独ではなく、無音の位置、響きの残り、入りの揺れ、期待の形成が重なることで、流れの停止、注意の再配分、期待の裏切りとして作用する。第三に、《Eclipse》では局所的な余韻と応答が中心であるのに対し、《November Steps》ではそれが管弦楽を含む全曲規模の形式設計へ拡張される。

本稿の限界は、知覚効果の実験的検証や視覚音楽への実装を扱っていない点にある。また、三つの分析次元は武満作品から抽出した操作的分類であるため、他の作曲家や他媒体に適用する際には、判別条件を改めて調整する必要がある。

今後の発表では、譜例、録音上の時点、演奏記述の位置をさらに明確にし、各局面の再現性を高める必要

表 2: 二作品における分析結果の整理

作品	中心となる局面	分析結果
《Eclipse》	尺八と琵琶の局所的応答。図形記譜、息、残響、短い無音。	残響・呼吸・入りの揺れが境界を薄くし、A 流動の停止 とB 沈黙の配置 を作る。応答の遅延や置換により、C 期待の裏切り も局所的に現れる。
《November Steps》	管弦楽音塊と邦楽器独奏の対置。独奏カデンツァ、長い休止、密度変化。	《Eclipse》の局所的な「間」が全曲規模へ拡張される。Bが形式的距離を作り、Cが段落予測をずらし、Aが音塊後の進行感を停止させる。

がある。視覚音楽へ転用する場合には、音の分節と映像イベントの対応、無音と無映像の媒体差、期待を形成する視覚の手がかりとその遅延・置換の設計を具体化することが課題となる。

7. 参考文献

- Bellando, Nick, and Bruno Deschênes. 2020. "The Role of Tone-colour in Japanese Shakuhachi Music." *Ethnomusicology Review* 22 (1): 43–57.
- Burt, Peter. 2001. *The Music of Toru Takemitsu*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Galliano, Luciana. 2002. *Yogaku: Japanese Music in the Twentieth Century*. Translated by Martin Mayes. Lanham, MD: Scarecrow Press.
- Irlandini, Luca A. 2022a. "Musical Time in Toru Takemitsu's November Steps." *Per Musi* 42: e224224. <https://doi.org/10.35699/2317-6377.2022.40417>.
- Irlandini, Luca A. 2022b. "Integration and Opposition of Western and Japanese Traditional Instruments in Takemitsu's November Steps." *Per Musi* 42: e224204. <https://doi.org/10.35699/2317-6377.2022.36944>.
- Kramer, Jonathan D. 1988. *The Time of Music: New Meanings, New Temporalities, New Listening Strategies*. New York: Schirmer Books.
- Meyer, Leonard B. 1956. *Emotion and Meaning in Music*. Chicago: University of Chicago Press.
- Ohtake, Noriko. 1993. *Creative Sources for the Music of Toru Takemitsu*. Aldershot: Scolar Press.
- Takemitsu, Toru. 1995. *Confronting Silence: Selected Writings*. Translated and edited by Yoshiko Kakudo and Glenn Glasow. Berkeley: Fallen Leaf Press.

- Uno, Yayoi. 1998. "Two Cultures and 'Autumn': The Role of Shakuhachi and Biwa in Toru Takemitsu's Orchestral Works." *Dongyangu-mak: Journal of the Asian Music Research Institute, Seoul National University* 20: 213–251.
- 上野, 知子, 編. 2007. 『日本戦後音楽史 上』. 東京: 平凡社.
- 西山松之助・徳丸吉彦・蒲生郷昭・南博, 編. 1983. 『間の研究: 日本人の美的表現』. 東京: 講談社.
- 長木, 誠司. 2015. 『戦後の音楽: 芸術音楽のポリティクスとポエティクス』. 東京: 青弓社.

8. 参考作品

- 武満, 徹. 1966. 《Eclipse》. 楽譜. 国立音楽大学図書館所蔵.
- 武満, 徹. 1967. *November Steps: For Biwa, Shakuhachi and Orchestra*. Full score. London: C. F. Peters.

9. 著者プロフィール

邱 愈茗 (Yuming QIU)

邱愈茗。国立音楽大学大学院博士後期課程在籍。音楽・視覚・空間を横断する創作研究を行い、東アジア美学、視覚音楽、インターメディア表現における時間構造の方法論化を研究している。



この作品は、クリエイティブ・コモンズの表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンスで提供されています。ライセンスの写しをご覧になるには、<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/> をご覧頂るか、Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA までお手紙をお送りください。